



書評・新刊紹介

宮田昌彦・谷城勝弘・山田寛治 編

水生・湿生植物生活史図鑑

いまから三十数年前、500 余種の藻類について生活史を網羅した、三巻からなる図説書が刊行されたことがあった。筑波大学生物科学系の教授だった堀輝三先生（1938–2006）が内田老鶴圃から上梓した『藻類の生活史集成第 2 巻 褐藻・紅藻類』（1993）、『同第 1 巻 緑藻類』（1994）、『同第 3 巻 単細胞性・鞭毛藻類』（1994）である。これら三巻は生活史の図説として企画されながら、広範囲の分類群について各ステージが詳細に図解された生活環（生活史の両端を繋いで輪にしたもの）と分類から利用まで多彩な情報とを掲載していたことから、実は藻類の同定にも便利で、現在も藻類図鑑としても重宝されている。当時、部下として出版のお手伝いをしていた筆者は、堀先生から陸上植物の生活史を集めた第 4 巻の構想を打ち明けられたが、その計画は、先生の研究の重心がイチョウ学へ移り、退職後まもなくして逝去されて実現にいたらなかった。今夏、この『水生・湿生植物生活史図鑑』を手にし、その高い網羅性に、かつて堀先生が構想した植物全グループの生活史集成が三十年越しに実現したのを目にした思いである。

本書が対象とする生物の範囲は広い。その編集方針は冒頭から革新的で、従来の図鑑であれば狭義の水草（抽水植物、沈水植物、浮葉植物、浮遊植物）のみで纏めたくところ、序文から現代日本の植物多様性保全に対応させることを見据えた生態学的水草の再定義が試みられ、「水生植物、不完全湿性植物、水生のコケ植物、大型藻類」を広義の水草としている。そのあたりの議論は、生育環境の分類と併せて第 1 章の概論で深められる。その結果、本編となる第 2 章で 534 頁にわたって取り上げられる多細胞性光合成生物は、裸子植物（2 種）、被子植物（416 種）、大葉シダ植物（16 種）、小葉植物（1 種）、コケ植物（5 種）、車軸藻植物（13 種）、地衣類（3 種）の 456 種に達する。実際、最初に登場するのはヒノキ科の樹木（スイショウ）であり、最後は海岸性地衣類（ウシオイボゴケ）で終わる。各種 1 頁に全形だけでなく、花や果実や孢子などを押さえたカラー図版と生態、生育形、形態、生活史、分布、語源、漢名、民俗などの情報が記載され、主要な種については 1 頁追加して生活環を図示している。この生活環と季節性の図表がその植物の生き方を理解するのに不可欠なのは言うまでもないが、あえて言っておきたい。第 3 章では絶滅危惧種の基本知識や水草生育地での保全活動の実践例などに加え、水草 60 数種の育て方まで解説されている。また、随所に挿入された 8 つのコラムも、水草研究の歴史からシャジクモ科の分類形質まで興味深く、読み応えがある。



北隆館

B5 判 617 ページ（オールカラー）

2025 年 7 月 10 日

定価：22,000 円（本体 20,000 円＋税）

ISBN：978-4-8326-1062-0

編集・執筆者の 1 人、宮田昌彦先生は、「昆明・モントリオール世界生物多様性枠組」（2022）の行動目標である「30 by 30」すなわち、『2030 年までに陸域、陸水域並びに沿岸域及び海域の少なくとも 30% の保全を達成する』とした目標達成の一助となることを目指したという（序文より）。こうした狙いで企画された本書の最大の特徴は、やはり敢えて『水草生活史図鑑』とせず、日本の水辺に現れる植物すべて、樹から藻までを掲載対象にしたことと思われる。この 1 冊があれば現地調査で目にした植物の見当がつけられる（唯一惜しまれるのは、海草はあって海藻がないことか）。これは実際に総合的な植物相調査や生態調査を行ってきた研究者の発想である。宮田先生（ご専門は海藻のはず）は千葉県立中央博物館で植物研究科長や分館海の博物館の館長を歴任され、2020 年には『日本海草図譜』を出版（参照：藻類 69 巻 108–109 頁）されている。そうした広いフィールドでの活躍のご経験が、この実用的で美しい図鑑の実現を可能にしたのだろう。水辺で植物調査を予定するすべての研究者にお薦めの 1 冊（必携と言いたいところだが、重い）。

北山 太樹（国立科学博物館）